



積 木



河村 恵

四角い空を見ていた。

日曜日の夕方、残り少ない余暇を楽しむ人
その中を抜け出し、帰宅するとシチューの匂いがした。
食事をし、風呂に入り、ベッドに入った。

まばたきをすると、朝だった。

キッチンにいる妻からのメールで目を覚ます。

「おはよう」というメールを見て、「起きたよ」と返信し、身支度をし、いそいそとパンを食べ、いそいそと会社へ向かう。

四角い定期券で、四角い電車に乗ると、四角い人たちがいた。ラッシュ時のごみごみした車内は、四角い人たちが、ソリティアのようにきれいに納まっていた。

私がその中に入ると、きれいに整頓されていた四角い人たちが崩れて、誰かのおなかの角がドアに挟まれたりしてしまった。

「車内、混みあいまして、大変ご迷惑をおかけしております。ドア付近の方は、角がはみ出さぬよう、ご注意願います」

周囲の人たちは、ちらちらと横目で私のことを見ってくる。

皆一様に、四角い顔に、四角い体、四角い目をしている。

コトコトと電車が動き出した。

揺れると、四角い人たちの体がぶつかるが、見た目よりも意外と人間らしいぷによぷによ感と、温かさがあって、なんだか安心した。

電車が停まり、降りる人たちを見ていると丸みを帯びてくる人もいた。

私は、思わず、自分の体を確かめた。

やはり、角はない。

四角くなりたいわけでもないが、周囲が皆四角いと一人だけ違うことに不安を覚えてしまうのだ。

丸く突き出たおなかをさすりながら、自分が四角くなったときを想像してみた。

頭は小さく、足もけっこう細い。おなかだけ出ているので、きれいな四角になれるのか？ きつとひし形になるのではないか、などと考えていると、会社に着いた。

やはり、みんな四角くなっていた。

「おはようございます」

「おはよう」

受付嬢の美樹まで四角いことにはショックだった。四角くなっても美人は美人だ。

上司、後輩たちの四角い姿は、滑稽だったり、あわれだったりした。

中でも、部長は台形のようになっていて、歩きにくそうにしている。

「あ、私がやります」

部長の危なっかしい動きは黙ってみていられなかったのだ。

「今日は朝からやけに気がきくな。何かいいことでもあったな？」

部長は少しいやらしい目をして訊いてくる。

四角い人たちを見ているのは飽きなかった。

仕事をするにも、電話をするにも、四角い指や、四角い頭でこなしていく。

午後三時。

だいぶ四角い環境にも慣れてきた。人間の順応能力に感心した。

先週から準備していたプレゼンもうまくいき、順調だ。

外回りの帰りに、コーヒーを飲んだ。四角いコーヒーカップを持つと寒さで失いかけていた指先の感覚が戻ってきた。

会社に戻っても、やはり部長は台形のままだった。

日報を提出し、足早に岐帰路に着いた。

「ただいま」

「お、お前まで...」

妻も四角くなっていた。ショックのあまり次の言葉が出てこない。

「あなたこそ、ちょっと丸くなったんじゃない？」

妻の言葉が理解できずに、ミラーの前でおなかの肉をつまんだあと、赤くなったおなかを軽くさすった。

「ふん、太っているのは前からじゃないか」

マッサージをするといいと、友人に勧められて、やってみたのが2年半前。友人はみるみる痩せていったが、それはマッサージではなく脂肪吸引をやっていたと噂が立った。効果がないとわかってからも何となくおなかをさす癖がついてた。

すると、体の内側、しかもだいぶ奥のほうに、固い芯のようなものを感じた。

「俺も、四角い人間の一人だったのか」

四角い体の上に肉が付いて丸みを帯びて見えていたことを知ると、台形の部長も、四角いカップも笑えなかった。

四角い顔の妻はまるで別人だった。

「今日は、何かあったのか？」

「町内会の奥田さん」

「ああ、また何かやったのか」

少し甲高い妻の声に耳を傾け、「うん、うん、そうだね」と言っていると、妻の体の角がとがってきた。

気付かれないようにそっと体を離れた。

「ねえ、今度の連休、旅行に行かない？最近行ってないし」

「今からだと、国内だな」

「私、北海道に行きたいの」

旅行が具体的になってくると、妻の体は丸みを取り戻してきた。

「丸くなったね」

そう言うと、妻は嬉しそうにうなづく。

「じゃあ、私、調べておくわ」

嬉しいことがあると丸みを帯びてくるらしいことに気付いた。

その後、料理の腕が上がったとか、若く見えるとか、立て続けに褒めてみた。

妻はコーヒーのお代わりを注ぎに立った。

キッチンから、鼻歌を歌いながら私に近づいて来る。どんどん丸くなり、私の腕の中で球になってしまった。

私は怖くなって球になった体をたたいてみた。

「痛いわねえ」

いつものサイズに戻った妻を見て、一安心した。

「そんなに珍しそうに見ないで」

もう一度、まばたきをすると、妻からのメールだった。

「起きてよう」

受信メールが7件になっていた。

「夢か」

キッチンでいつもの鼻歌を歌う妻の、ふっくらとした後姿を見て安心した。

「おはよう」

「おはよう。もう、何度もメールしちゃった」

「たまには起こしに来いよ。広い家でもあるまいし」

「そうね」

そう言って、嬉しそうに妻が近づいてきた。

思わず一歩下がり、いそいそと会社へ向かった。